

吾は現在猫五匹及び九十二歳の老母と暮らしてあり。三十代の頃より猫數匹と暮らし、家に動物いらざる事はならざりき。多分猫好きの祖父の血筋ならむ。海外出張多き時、ペット・シッターなる人たちに留守依頼する事も多々ありき。二十年前に白金臺へ引越し、母と暮らし始め、犬を飼ふ事となりき。

犬は猫と違ひ毎日二回の散歩絶対必要なり。成犬になるまでの仔犬躰けるは難しき事と聞きたれど、我家の愛犬チャミーはいと賢く、何事も一度言ひ聞すと理解し、あまりにも利口にて不憫に思ふ程なりき。例えば、散歩の最中に電信柱を飼ひ主との間に挟みでは駄目なりと言ひ聞せば、二度とするは無かりき。座れ、待て等も三回教へたれば記憶せる。ただ、十カ月になるまでは我家の上履きは靴箱以外の場所に置く事能はざりき。永久齒生えて来る過程においてかゆきか、何でも噛みちぎる。

愛犬の散歩のおかげにて近所の「犬友」も大勢できたり。ラブラドル・レトリバーのマクとリリー嬢飼ひたる美術館の學藝員夫妻、柴犬のミックス犬ラッキー君の「お父さん」の大學教授、米國より移住せしシリウス君、黒柴の紋ちやんのお母さん達等々。朝五時半より散歩せるも、必ず誰か玄關まで迎えに来たり。夏は早朝明るければ安心なれど、冬は暗闇にて薄氣味悪し。ただ、愛犬チャミーは中型犬にても大型犬に比ぶる程大きく、體重二十キロ超えたり。日本犬とシェパードのミックスなりしたため、精悍なる顔つきなれば、さうさう人は寄らず。十五歳になるまで病氣せし事あまりなく、元氣なる相棒なりき。十六歳の時、右目の中に腫瘍でき、犬友の紹介にて高井戸の鍼灸と成城學園の「眼科」に毎週通ひたり。快適に晩年過ごせること期待し、萬難を排し獸醫通ひをしき。一昨年十月に白金臺より我生まれ育ちし世田谷區奥澤に引越したり。

十八歳になりしチャミーは引越して、ひと月たちし十二月一日に大好きなる散歩より戻ると眠るやうに天壽を全うしき。まるで飼ひ主新居に落ち著くを見届くるやうに。獸醫曰く「チャミーの肉體的限界とうに超え、飼ひ主のためのみに生きたり」と言はれ、何とも切なく、やりきれぬ氣持ちになりき。

ペットロスといふ言葉良く聞きたれど、チャミーを失ふせし喪失感大きく、いまだに乗り越ゆることを得ず。多分二度と犬飼ふこと能はずと覺ゆ。悲しき時も、嬉しき時も、楽しき時も何も言はざりし「相棒」最愛のチャミーは、全身全靈にて愛情表現し、その存在のみにて吾癒せらる。犬友たちの愛犬も年々減り行く。彼らもまた、相棒失くすことになりき。ペットは無條件の、それも見返り要求せぬ愛情與へらる。特に犬の場合は

Man's best friend と言はるるべからいなれば。

